

剰余価値説の成立過程（一）

松田 弘 三

一

「剰余価値説はマルクス経済理論の礎石である。」（レーニン『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』¹⁾）ということほど、明白なことがらはない。なぜなら、労働者の剰余労働——それはすべての階級社会の存立の基礎である——を、まさに剰余価値の形態において取得するところに、資本制生産様式の基本的特質があり、そしてこの剰余価値の生産は、「その周囲に今日の社会秩序全体がこりかたまつた結晶核」²⁾であるからである。それゆえに、この剰余価値搾取の事実をいかに曝露し、または隠蔽するか、科学的経済学と俗流的弁護論的経済学との決定的分岐点があるといつてよからう。剰余価値の理論的に完全な解明による資本制生産の秘密の曝

露は、唯物史観の定式化とともに、社会主義を科学にしたところの、マルクスの「二つの偉大な発見」（エンゲルス『反デューリング論』³⁾）である。それは今日では、全世界の意識ある労働者と進歩的インテリゲンチヤの思想的共有財産となつてゐる。

① 邦訳『レーニン二卷選集』第一卷第一分冊 八七頁。

② F. Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. 『デューリング論』邦訳『マルクス・エンゲルス選集』第一四卷 三六三頁。

③ ブルジョア経済学者のマルクスにたいするさまざまな論難中傷——たとえば、ボエーム・パウエルク (Bohm-Bawerk) の『マルクス体系の終結』(Zum Abschluss des Marxschen Systems, 1895) や、そのやきなおしであるわが小泉・高田博士のものなど——においても、直接剰余

価値説を論駁したものがほとんどみられないこと——その基礎理論である労働価値説にたいするいろいろの無理解な非難にもかかわらず——は特徴的である。

④ Engels, *ibid.* 邦訳『選集』第一四卷 一〇二頁。

なおエンゲルス『マルクス葬送の辞』にはつぎのようにべられている。「ダーウインが生物進化の法則を発見したように、マルクスは人間の歴史の発展法則を発見した。それはしげりすぎたイデオロギー的繁茂のもとにおおわれていた簡単な事実である。すなわち、人間は政治や科学や芸術や宗教などをいとむまえに、まず食い、飲み、住み、着物をきなければならぬ。したがって、直接的な物質的生活資料の生産が、それとともに、ある国民またはある時代のそのときどきの経済的發展段階が土台をなし、その土台からその人々の国家制度や法律思想、芸術や、また宗教的観念さえも、発展したし、したがってこれらのものもまたこの土台から説明されなければならず、これまでのようにその逆に説明されてはならないということ、これである。

それだけではない。マルクスは、今日の資本制生産様式とそれによってうみだされたブルジョア社会との特殊な運動法則をも発見した。剰餘価値の発見とともに、この分野には突然光明が生じた。これまでのいつさいの研究は、ブルジョア経済学者のものも社会主義的批判家のものも、くらやみのなかをさまよっていたのである」

(邦訳『選集』第一七卷 二頁)と。

それでは、剰餘価値説にすでに自明の真理として、いまさら問題にする必要のないものであろうか。そうではないであろう。「支配階級の思想はいずれの時代にあっても支配的な思想である」ブルジョア階級はブルジョア階級であるかぎり、いついかなるときにも、剰餘価値論の事実を承認することをあくまで拒否する。剰餘価値論を完全なかたちであたえた、『資本論』第一卷(『Das Kapital', Bd. I)の刊行(一八六七年)以後のブルジョア経済学の歴史は、剰餘価値の搾取を隠蔽するためのさまざまの破産したころみ(いわゆる利子学説、すなわちたとえば、時差説、節欲説、生産力説、動態説、等々)として要約することができる。いわゆる社会通念の領域においては、ブルジョア・イデオロギーの支配は、いっそうはなはだしい。しかも他方において、現代資本主義のすべての複雑・高度な諸現象、たとえば最近スターリンが現代資本主義の基本的経済法則としてあげた、最大限利潤の問題(スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』(一九五二年)⁷⁾)にしても、ただ剰餘価値論の基礎のうえでのみ、これを正しく説明することができるであろう。すべての経済問題の理解の鍵としての剰餘価値説の基本的重要性はむしろいよいよ深まり、それにあらゆる方向から光をあてることはますます必要となっている。ソ同盟の経済学界におい

一、剰余価値説の問題があらためてとりあげられていること（ブリューミン）剰余価値説はマルクス経済理論の礎石である」『経済学の諸問題』一九五三年第三号⁹⁾もゆえなしとしなご。

⑤ Marx-Engels, Die deutsche Ideologie. 邦訳『選集』第一巻 五一頁。

⑥ ユッパ『経済学と資本主義』(M. Dobb, Political Economy and Capitalism, 1937) 第五章参照。なお、労働価値説の効用価値説にたいする決定的優越性は、後者が剰余価値を説明しえないのに反して、前者がこれを説明しうる点にあるとするドツプの所説(第一章参照)は注目値する。

⑦ 邦訳 五月書房版 五二頁。

⑧ 邦訳『経済評論』一九五三年七月号。

わたしも以下において、剰余価値説を一つの観点から、すなわち剰余価値がマルクス以前の諸学者によっていかにして次第に認識されてきたか、そしてマルクスの剰余価値説はいかにして形成され、またいかなる意味で劃期的なものであったかという観点から、とりあつかつてみたいとおもう。もともとマルクス以前における剰余価値思想の発展については、マルクス自身が『剰余価値学説史』(『Theorien über den Mehrwert』, 3 Bde. 1904-10)——それは著者が『資本論』

第四卷(経済学説史)として刊行する予定であった遺稿を、カウツキーが独立の著作として出版したものであり、したがってかならずしも剰余価値説の歴史のみをあつかったものとはいえないが——のなかで詳細に検討しているので、簡単な素描にとどめる。¹⁰⁾

⑨ なお『資本論』第二卷の序文(M. E. J. Institut Ausgabe, S. 9-17, 長谷部文雄訳〔青木文庫版〕(5)一七—一八頁)における、エンゲルスの剰余価値説史——マルクスをふくむ——の簡潔で示唆に富む叙描を参照。

⑩ カウツキーによるマルクスの手稿の歪曲——それは配列の変更や原文の改作や削除におよんでいるという——については、ブルシリンスキー、プレイス「マルクス『剰余価値学説史』の科学版の準備について」(『経済学の諸問題』一九五〇年第九号 紹介 マルクスII エンゲルス選集月報第一九号)参照。ただしこの科学版はまだ刊行されていないようである。

まずはじめに、マルクスによる剰余価値説の完成した定式化の概要を、示しておくことが必要であろう。いままでもなく、それは『資本論』第一卷第二篇より第五篇まで——とくに第二篇第四章、第三篇第五章第二節、および第六、七章——にみられる。¹¹⁾

⑪ 剰余価値説のもっともすぐれた要約はエンゲルス『反

デューリング論』第二篇「経済学」第七章「資本と剰余価値」（邦訳『選集』第一四卷三六〇—三六四頁）にある。

マルクスは第一篇において「商品と貨幣」を分析し、交換の発展が、商品のなかにふくまれていた使用価値と価値との対立を、商品と貨幣とへの商品の二重化によって確立することを明かにし、貨幣の機能を分析したのち、第二篇第四章「貨幣の資本への転化」を、この貨幣の媒介によっておこなわれる商品流通と、資本の流通との形態的区別をもって、はじめている。商品流通の公式が、 $M(商品) \rightarrow C(貨幣)$ 、 $M(商品) \rightarrow W(貨幣)$ 、 $M(商品)$ 、購買するための販売であるのにならして、 $C(貨幣)$ 、販売するための購買である。その運動においてこの後者の流通を描く貨幣は、資本に転化するものである。形式的にはこの二つの循環を区別するものは、おなじ対立的な二つの流通段階の順序が逆なことだけである。だがそこからすべての相違がはじまる。商品流通においては、運動の出発点および終点が質的に異なる使用価値であり、その目的は消費、欲望の充足である。しかるに資本の流通においては、その両極とともに貨幣であり、質的には同一で、ただ量的に異なりうるだけである。それゆえ、最初に投げ入れられたよりもより多くの貨幣が最後に流通から引きあげられなければ、この流通は

無目的となる。だからこの過程の完全な形態は、 $C \rightarrow W$ （より多くの貨幣）であって、このCは $C+4C$ （Cの増加分）に等しい。この最初の価値以上の超過分を、マルクスは剰余価値と名づける。最初に投下された価値は、流通において自らを維持するばかりでなく、その大きさを変じ、ある剰余価値をつけ加える。すなわち自らを増殖する。そこでこの運動によって、その価値は資本に転化する。以上は剰余価値の現象的な規定である（第一節「資本の一般的公式」）。

しかしながら、剰余価値は商品流通から発生することはできない。商品の交換は、その純粹な姿においては等価交換であるが、剰余価値は不等価交換の場合、すなわち販売者が商品をその価値以上に売る場合にも、購買者が商品をその価値以下に買う場合にも生じえない。なぜなら、各人は交互に販売者となり購買者となるのであるから、右のいずれの場合にも、各人の利得と損失とはたがい相殺されるからである。また剰余価値は詐欺からも生じえない。なぜなら、なるほど詐欺は一方を犠牲にして他方を富ませることはできるが、しかし両者によって所有される価値の総額、したがってまた社会に存在する価値の総額を増大させることはできないからである。

しかもなおわれわれは、資本家階級が全体として、購入し

たよりも高く販売することによって剰余価値を獲得し、たえずその資本の総額を増大させているのをみる。かくして、剰余価値はどこから生まれるかというこの問題は、詐欺や暴力の手段によらないで純経済的に解決されねばならない。しかも商品交換の法則、すなわち等価交換の基礎のうえで説明されねばならないのである（第二節「一般公式の矛盾」）。

マルクスはこの問題を、第四章第三節「労働力の購買と販売」および第三篇第五章第二節「価値増殖過程」において解決している。その解決はこうである。資本に転化さるべき貨幣の価値増大は、この貨幣そのものからも、また商品の購買および販売からも生じえない。なぜなら、貨幣はここでは商品の価格を実現するだけであり、そして等価交換が前提されているからである。それゆえ、この変動は購買される商品とともに生じなければならないが、その価値とともにではなくて、その使用価値から、すなわちその商品の消費から生じなければならない。「一商品の消費から価値をひきたすためには、わが貨幣所有者は運よく市場で、その使用価値が価値の源泉であるという特殊の性質をもっており、したがってまた、その現実の消費そのものが労働の対象化、すなわち価値創造であるような一商品を発見しなければならぬであらう。そして実際に、貨幣所有者は、市場でこのような特殊の

商品のみいだす——労働能力すなわち労働力がそれである」¹²⁾労働力というのは、人間の身体のうち存在していて、彼がならからの使用価値を生産するときにはいつでも運用するところの、肉体的および精神的な諸能力の総計のことである。そしてこの労働力の発現が労働なのである。

しかし労働力の商品化のためには一定の条件が必要である。マルクスはいう。「貨幣が資本に転化するためには、貨幣所有者は自由な労働者を商品市場にみいださねばならない。ここに自由とは、一方では、彼は自由な人格として自分の労働力を自分の商品として処分するという、また他方では、彼が売るべき他の商品をもたず、自分の労働力の実現に必要ないっさいのものからひきはなされ、自由にされているという、二重の意味においてである」¹³⁾と。だが、一方の側に貨幣または商品の所有者が、他方の側に自分の労働力以外のなものも所有していない者が存在するというこのような関係は、けっして自然史的な関係でもなく、またすべての歴史的時代に共通した社会的関係でもない。このような関係は、封建的生産様式の分解といわゆる本源的蓄積、すなわち直接生産者と生産手段との分離、とくに農民からの土地取奪の結果として、十五世紀末ないし十六世紀はじめ以来大規模にあらわれたのである（第七篇第二章「いわゆる本源的蓄積」参照）。

だから労働力の商品化、すなわち賃労働は資本制生産様式の指標なのである。

さて労働そのものはなんらの価値をもたないが、労働力はそうではない。労働力の価値は、「他のすべての商品の価値とおなじく、この特殊の商品の生産に、したがってまたその再生産に必要な労働時間によって規定されている」¹⁴⁾すなわちそれは、労働者自身を労働可能な状態に保持するために、また彼の種族を繁殖させるために、必要な生活資料の生産に要する労働時間によってきまるのである（第四章第三節）。

⑩ K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 174 長谷部訳(2)三一五頁。

⑪ Ibid. S. 176 訳三一八頁。

⑫ Ibid. S. 178 訳三二〇頁。

いまこれらの生活資料が日々に六労働時間を代表するものと仮定しよう。資本家は生産手段（原料および労働手段の磨減分）の購入に、たとえば二四労働時間を代表する貨幣額を支出し、労働力の購買に六労働時間を代表する貨幣額を支払う。それによって資本家は労働者に、その労働力の一日分の価値全部を支払ったわけである。ところで、労働者がこの資本家のために六時間だけ労働したならば、彼は資本家にたいして支払われた労働力の一日分の価値を全部補償したことに

なる。だがそれでは生産物の価値、すなわち三〇労働時間に相当する価値は、その生産に投下された価値に等しく、すこしも増大していない。投下された価値はなんらの剰余価値も生みださず、貨幣は資本に転化しなかったのである。それゆえ、労働力の購買者は彼によっておこなわれる取引の性質について、まったくちがった見解をもつのである。労働者を二四時間生かしておくために六労働時間しか必要でないということは、労働者が二四時間のうち一二時間労働することをけつしてさまたげるものではない。労働力の価値と労働過程におけるその価値実現とは、二つのががった量である。貨幣所有者は労働力の一日分の価値を支払った。それゆえ労働力の一日間の使用、すなわち一日間の労働もまた彼に属する。労働力の一日間の使用が足りだす価値が、労働力そのものの一日分の価値の二倍の大きさであるということは、購買者にとっては非常に好都合であるが、しかし商品交換の法則からすれば、けつして販売者にたいするなんらの不正でもない。資本家にはこの事情があらかじめわかっていたのであり、だから労働者は六時間分のみでなく、一二時間分の労働過程に必要な生産手段を見出す。すなわち四八労働時間が対象化されている生産手段を、いまや、生産物の価値は六〇労働時間を代表するものであるが、しかるに投下された価値は五四労働

働時間——生産手段に四八労働時間、労働力に六労働時間——に相当するものにすぎない。手品はついに成功した。六労働時間に相当する剰余価値がつくりだされ、貨幣は資本に転化したのである（第五章第二節）。

ところでこの剰余価値の生産過程、すなわち価値増殖過程において、生産手段、すなわち原料・補助材料および労働手段に転化する資本部分と、労働力に転化する資本部分とはちがった役割を果す。前者は生産過程のなかでその大きさを變じないから、マルクスはこれを不変資本と名づけ、後者はその大きさを變じ、それ自身の等価とそれ以上の超過分たる剰余価値とを再生産するから、これを可變資本と名づける（第六章「不変資本と可變資本」）。

剰余価値のその直接の源泉である可變資本にたいする比率は、剰余価値率とよばれる。剰余価値が生みだされたのは、労働者が彼の労働力の一日分の価値を再生産するための時間（必要労働時間）を超えて、資本家のために無償で一定の時間（剰余労働時間）労働させられたからである。資本がそれを強制したのである。マルクスはいう。「価値をたんなる労働時間の凝結、たんなる対象化された労働として把握することが、価値一般の認識にとって決定的であるように、剰余価値をたんなる剰余労働時間の凝結、たんなる対象化された剰

余労働として把握することは、剰余価値の認識にとって決定的である。」そして「種々の経済的社会構造を——たとえば奴隸制の社会を賃労働の社会から——區別するものは、この剰余労働が直接生産者・労働者から搾りとられる形態にほかならない。」と。剰余価値率は剰余労働の必要労働にたいする比に等しい。だからそれは、資本による労働力の搾取度の正確な表現である（第七章「剰余価値率」）。

⑮ Marx, *Ibid.*, S. 225 訳三八五頁 なおつぎのことを参照。「マルクスはいっている。「資本が剰余労働を支配したのではない。社会の一部のものが生産手段を独占しているところではどこでも、労働者は自由であろうと不自由であろうと、生産手段の所有者のための生活資料を生産するために、自己保存に必要な労働時間のうえに、余分な労働時間を追加せねばならぬ」(Ibid., S. 225 訳四一一頁)……だが、この剰余労働の生産物が剰余価値の形態をとるときにはじめて、すなわち生産手段の所有者が自由な労働者を搾取の対象としてみだし、商品生産の目的でこれを搾取するときにはじめて、マルクスによれば、生産手段は資本という特殊の性質をおびるのである。」(Engels, *Anti-Dühring*, 邦訳前掲書三六七頁)

剰余価値の生産は二つの主要な方法によっておなわれる。すなわち、労働日——労働時間の絶対的大きさ——の延長（「絶対的剰余価値の生産」——第三篇）による方法と、必

要労働時間の短縮、およびこれにともなう労働日の両構成部分の量的割合の変化（「相対的剰余価値の生産」——第四篇）による方法とである。前者に関連してマルクスは、労働日の制限をめぐる労働者階級と資本家階級との闘争を分析し、後者に関連して、資本主義によってなされた労働生産力発展の三つの主要な歴史的段階——(1)協業、(2)分業とマニユファクチュア、(3)機械と大工業——を研究している。そして、第五篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」の最後の章において、剰余価値率をあらわす公式

$$\frac{\text{剰余労働}(\text{不払労働})}{\text{必要労働}(\text{払労働})}$$

を示したのち、つぎのような剰余価値の¹⁶⁾実体的規定をあたえている。「すべての剰余価値は、それがのちに利潤・利子・地代などのかなる特殊の姿態に結晶しようとも、実体的にみれば不払労働時間の物質化である。資本の自己増殖の秘密なるものは、これを解いてみれば、資本が他人の一定分量の不払労働を自由に処分するということである。」と。第二篇のはじめに資本の一般の公式に関連してあえられた、剰余価値の現象的規定は、ここにその内容をえた実体的規定としてあらわれ、本来のない狭義の剰余価値論は以上をもつておわっている。なお、剰余価値のその特殊の姿態への結晶は、周知のように『資本論』第三巻において、すなわち剰余価値の利潤（平均利潤）への転化は第一篇

および第二篇において、利潤の一部の商業利潤への転化は第四篇において、利潤の利子および企業者利得への分裂は第五篇において、超過利潤の地代への転化は第六篇において、それぞれとりあつかわれているのである。

⑯ *ibid.*, s. 559 訳(3)八三八頁。

さて以上の剰余価値論が、マルクスの労働価値論の基礎のうえにたち、それと緊密な関係にあることは、一見しただけであきらかであろう。ここではマルクス価値論の素描をもあたる余地はないが、その主要な諸契機、すなわち商品の二要因——使用価値と価値との対立と統一。価値の実体的抽象的人間的労働による、その大きさの社会必要労働時間による規定。複雑労働の簡單労働への還元。使用価値を生産する具体的有用的労働と、価値を生産する抽象的人間的労働との労働の二重性格。使用価値と価値、具体的労働と抽象的労働との矛盾の展開としての、貨幣形態にいたる価値形態の発展。商品の物神的性格。これらの理論を基礎とせずには剰余価値論が成立しえないことはいうまでもない。なによりもまず、さきにもたように、剰余価値の剰余労働への還元は、商品価値の抽象的人間的労働への還元を基礎とするものであり、労働力の価値決定は一般商品の価値決定を基準とし、労働の二重性格は、資本制生産過程の、労働過程と価値増殖過程とし

この二重存在を基礎とし、また生産過程における新価値の創造——抽象的人間的労働による——と、旧価値の維持と移転——具体的有目的労働による——との、労働の成果の二面性となつてあらわれる。等々。それゆえ、以下の剰余価値説の史的考察にあつても、剰余価値論それ自体の成立過程とともに、労働価値論の發展過程にもまた、必要なかぎりふれるであらう。

それでは本題にはいつて、まずマルクス以前のブルジョア経済学者および社会主義者たちが、いかに次第に剰余価値を認識してきたかの問題を概観することにならう。

二

1

ちかく刊行が予定されている『剰余価値学説史』の科学版（マルクス・エンゲルス・レーニン研究所版）においては、ジェームス・ステュアート（James Stuart, 1712-80）の学説の考察が冒頭におかれている。それは、重金主義と重商主義とに合理的な表現をあたえようとしたステュアートのこのころの批判は、重商主義のみならず、重農主義の理論の分析の手引きとなるからであるとされている。そこでわれわれもステュアートの見解からみてゆくことにしよう。

⑬ 前掲論文の目次プラン参照。それはマルクスの手稿の配列にしたがうものである。

「近代的生産様式の最初の理論的とりあつかい——重商主義——は、必然的に、商業資本の運動において自立化した流通過程の表面的諸現象から出発し、したがって仮象だけをとりあげた。……現実の近代的経済科学は、理論的考察が流通過程から生産過程に移行する場合にはじめて始まる。」¹⁸⁾重商主義者たちは、剰余価値を純粹に交換、すなわち商品のその価値を超えての販売から説明した。ステュアートは全体としてはこの愚昧からぬけだしていなかったのであつて、むしろ彼はその「科学的な再生産著」であつた。¹⁹⁾科学的というのは、彼は個々の資本家が商品とその価値以上に販売することによつて獲得する剰余が、あたかも新しい富の創造であるかのような幻想をともしなかつたからである。それゆえ、彼は積極的利潤と相対的利潤とを区別する。積極的利潤は「労働、勤労および熟練の増大」から発生し、「一般的福祉の増大」をもたらず。ステュアートがこれをもつて、労働の生産力の發展の結果つくりだされる使用価値のより大なる量以外のなものをも理解していないことは、明かである。相対的利潤は「当事者間における富の均衡の動揺」²⁰⁾から発生し、一般的財産の増加をつくりださない。個々の資本家の利潤はつ

ねに相対的利潤、すなわち「讓渡利潤」²¹⁾であり、商品がその価値以上に売却されるということから発生する。したがって一方のものの利得は、他方のものの損失を意味する。このようにステュアートの剰余価値にたいする見解は、一面において重商主義者を越えたものをもっているが、他面においては基本的に彼らの見解をでない。それゆえ、「ステュアートは重金主義および重商主義の合理的表現である。」

価値論においてはステュアートの見解は混乱しているが、彼が「その先行者および後継者にくらべてすぐれていた点は、交換価値であらわされる独自の・社会的労働と使用価値をめざす現実的労働とを、はっきり区別した点である。」²²⁾すなわち、彼には労働の二重性格の理解の萌芽があった。さらに彼は資本の本源的蓄積過程を分析したほとんど唯一の経済学者であった。「資本の把握における彼の貢献は、一定階級の財産としての生産条件と労働力とのあいだの分離過程がいかにしておこなわれるかを証明した点にある。」²³⁾ステュアートが、ブルジョア古典経済学者たちにはみることのできないこれらの資本制生産の歴史的性格の理解を示したのは、彼が封建貴族の出身であって、資本主義にたいして批判的であったためであろう。

²¹⁾ Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 339 訳(9)四七八頁。

¹⁹⁾ Marx, Theorien über den Mehrwert, herausgegeben von Kautsky, Bd. I, S. 29 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第八巻五三頁。

²⁰⁾ James Stuart, Principles of Political Economy, 1763 Vol. I, p. 275-6.

²¹⁾ Ibid. p. 244.

²²⁾ Marx, Theorien, Bd. I, S. 32 訳五六頁。

²³⁾ Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, (M.E.I. Institute Ausgabe) S. 46 邦訳『選集』補巻五〇—五一頁。

²⁴⁾ Marx, Theorien, Bd. I, S. 33 訳五七頁。

2

しかし重商主義の支配のもとで、すでにステュアートより一世紀もまえに、古典経済学の先駆者があらわれていた。ウィリアムペティ (William Petty, 1623-87) がそれである。ペティは労働価値説の創始者として著名であり、彼が「近代経済学の建設者」とさえ評価されるのも、主としてそのためである。彼が労働価値説をもったとはっきりと定式化しているのは『租税貢納論』(A Treatise of Taxes and Contributions, 1662) のなかの「めづるべきである」[「ある人が、一ブッシェルの穀物を生産しうるのとおなじ時間をもって、一オンスの銀をペルーの地中からロンドンへ運入

でできることができれば、一オンスの銀は一ブッシェルの穀物の自然価格である。そこでもし採掘のいっそう容易な新しい鉱山によって、ある人が従来の一オンスとおなじ容易さをもって二オンスの銀を獲得することができるならば、他の事情を同一と仮定して、以前には五シリングであった穀物は、いまや一ブッシェルにつき一〇シリングとなるであろう。²⁶⁾ここで彼が自然価格とよんでいるものが商品の価値であることはいままでもないが、それはたんなる価値ではなくて交換価値であり、しかも交換価値はその貨幣的表現において、すなわち価格においてとりあつかわれ、貨幣は現実に存在する商品すなわち金および銀と考えられている。そして彼は金および銀を採掘する特殊の種類は、その生産物が金および銀と交換されることによって交換価値となるのべている。そのことによって「彼は実際には、ブルジョア社会における労働は、直接的な使用価値を生産せねばならぬのではなく、商品交換過程におけるその譲渡により、金銀として、すなわち交換価値として、すなわち対象化された一般的な労働として、みずからを表示しうる使用価値を生産せねばならぬ、と考えた。²⁷⁾」のである。

ところで、ペティはまた労働のほかに土地をも価値の尺度

と考えているのであるが、これも彼が商品の価値を金銀と同じ視したことから生じたものである。なぜなら、金銀の生産には労働のみならず自然も参加するからである。かくして「労働は富の父にして能動的原理であり、土地はその母である。」²⁸⁾という彼の根本思想から、ただちに価値決定にかんする、²⁹⁾「すべてのもものは二つの自然的単位、すなわち土地と労働とによって評価されるべきである。」という主張がみちびきだされる。ペティの労働価値説はこのような缺陷をふくんでいたけれども、諸商品の交換を規制する原理としてはじめて投下労働量を洞察したことは、資本制生産様式の内的連関の把握として、まことに天才的なものであった。

²⁵⁾ Marx, *Theorien*, Bd. I S. 1 訳二二頁。

²⁶⁾ *The Economic Writings of Sir William Petty*, ed. by Hall, Vol. I p. 50-51.

²⁷⁾ Marx, *Kritik*, S. 40-41 訳四二頁。

²⁸⁾ *Economic Writings*, p. 681.

²⁹⁾ *Ibid.*, p. 44.

さてペティの剰余価値思想であるが、彼は地代をもって剰余価値の本来的形態とみなしている。彼はいう。「ある人が自分の手で一定面積の土地に穀物を栽培することができると、すなわちこの土地の耕作に必要なだけ、掘ったり、犁いたり、

馬³⁰鋸で掻きならしたり、草を^と除ったり、刈上げたり穫入れたり、脱穀したり、簸^ひたりすることができ、かつまた、この土地に蒔くべき種子をもっている^と仮定しよう。この人がその収獲から、彼の種子および自分の食ったものと、衣服その他の自然的必需品と交換に他の人々にあたえたものとを控除したとき、残りの穀物はその年の自然かつ真実の地代であるとわたしはいう。そして七年、あるいはむしろ凶作と豊作とが循環する週期をなすような数年を平均すれば、普通の穀物地代がえられる。」³⁰と。この現物地代から、彼は貨幣地代を、その労働価値論の基礎のうえに、みちびきだしている。「しかし附随的ではあるけれども、さらにすすんでこの穀物ないし地代が、どれほどのイギリス貨幣に値するかが問題となりうるであろう。わたしは答える。他の一人がまったく貨幣の生産と製造とに従事する場合に、同一期間にその支出以上に蓄えうるだけの貨幣であると。すなわち他の人が銀のある国へ行き、そこで銀を採掘し、精錬して、それをいま一人が穀物を栽培するのと同じ場所へもつてきて、貨幣に鑄造する等のことをなし、またおなじ人が銀のために働いている期間を通じて自分の暮しに必要な食物をあつめ、かつ自分で衣服を獲得する等のことをするとする。そうすれば一人の人の銀は、他の人の穀物と価値が等しいと評価されるにちがいない。

前者を二〇オンス、後者を二〇ブッシェルとするならば、この穀物一ブッシェルの価格は銀一オンスということになるであろう。」³¹と。すなわち、彼は総生産物から原料と生産者の生活維持費をひきさった残余、またはその価値が地代となると考えていたのであって、したがってそれは事実上剰余価値であった。しかしここでは賃労働が欠けていることが注意されねばならない。

つぎに彼はこの地代から、剰余価値の副次的形態としての利子をひきだしている。すなわち彼は利子の標準を、貸付けられる貨幣が購買するだけの土地の地代に求めている。そして、ベティは独立の範疇としての利潤を知らなかったのであるが、それは資本制生産が未発達な当時の歴史的段階においてはやむをえないことであって、むしろ地代と利子とを一括してとりあつかい、これを生活維持のため以上の労働に還元しているすぐれた分析が高く評価されてよいであろう。

かくしてベティは労働価値説をはじめて定式化したばかりでなく、また剰余価値をもはじめて生産過程における労働の超過分——それが土地にむすびついた特殊の種類^の労働であり、また独立生産者の労働としてとらえられていたにしても——に還元することによって、剰余価値説の端緒をひらいたのである。マルクスが、イギリスの古典経済学はベティには

いまさらのカーネーにおわるといっていること³²⁾、この意味では過言とはいえないであらう。

③① Ibid. p. 43.

③② Ibid. p. 43.

③③ Kritik, S. 39. 訳四一頁。

3

つぎにわれわれは、重農主義の創始者フランソア・ケネー (François Quesnay, 1694-1774) の剰余価値にかんする見解に移ろう。すでにのべたように、重農主義者は剰余価値を商品の交換過程から、商品のその価値以上の販売から説明した。ケネーは重農主義を批判しつつ、等価交換の理論を展開している。すなわちいう。「純粹の商業」は「等価交換にほかならない。これらの価値については、両当事者いかに損失も利得もない。」³⁴⁾と。剰余価値が流通過程から発生しえないとすれば、それはただ生産過程から生じうるだけである。だが剰余価値の理論が確立されるためには、まず価値の概念が正しく把握されねばならぬ。

しかるにケネーの価値にかんする見解はきわめて多岐であり、一貫していない。彼は一方では、「土地は富の唯一の源泉である。」³⁵⁾とのべて、価値を一面的に使用価値として理解しているが、また他方では、「土地が生産するものは、それ

自体勤労、または人間の労働の生産物である。」³⁶⁾といつて、労働価値説な見解を示し、さらに「収入は土地と人間との生産物である。」³⁷⁾と書き、ペティとおなじように二元論的な理論を展開している。

ケネーはさらに使用価値と売上価値(=交換価値)とを区別し、あるところでは、「生産物の売上価値……人間の労働と勤労との結果である。」³⁸⁾とさえのべているが、しかしケネーの価値論を労働価値説であるとすることはできない。それはケネーにおいては、「農業が唯一の生産的労働とされている。すなわち労働はまだその普遍性と抽象性において把握されていず、まだその素材としての特殊な自然的要素(土地)にしばりつけられており、それゆえにまた労働は、まだ特殊な自然に制約された定在様式(「農耕」)において認識されたにとどまる。」³⁹⁾からである。要するにケネーは、右にみたように人間労働が価値の実体であるという認識の萌芽を示しながらも、その労働が農業労働にかぎられており、また価値と使用価値との同視の傾向がつかつたために、ついに一つのまとまった価値論をかたちづくることができなかつたのである。

③④ Oeuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, par A. Oncken, p. 666.

③④ Ibid. p. 538.

③⑤ Quesnay, *Maximes générales du gouvernement économique d'un royaume agricole*, Oeuvres, p. 331.

③⑥ Quesnay, *Impôts*, éd par G. Schell, p. 58.

③⑦ Quesnay, *Grain*, Oeuvres, p. 250.

③⑧ Quesnay, *Hommes*, par E. Bauer, p. 6.

③⑨ K. Marx, *Oekon. misch-Philosophische Manuskrifte*,

邦訳『選集』補巻4三三四頁（「」内は引用者）。

ケネーの剰余価値論、すなわち「純生産物」(produit net)の理論もおなじ缺陷をもっている。ケネーによれば農業のみが純生産物を創造することによって富を増殖する。なぜなら土地は自然の賜物を包蔵し、農業はこれを領有する行為だからである。したがって農業においては、その総生産物からそれを獲得するに要した一切の費用を控除しなお、この自然の賜物に相当する純生産物が残る。商工業においてはこのような費用を超える純生産物は生産されない。原料の変形や移転による価値の増加は、その間に消費される生活資料の価値に等しい。そこには価値の追加があるのみで、創造はない。

それゆえ彼にとっては、「土地は富の唯一の源泉であり、富を増加するものは農業である」⁴⁰⁾ことになり、農業のみが生産的で、商工業は不生産的だといふのである。

ケネーがこのように剰余価値は農業においてのみ生産され

ると考えたのは、つぎのような理由にもとづくのである。すなわち剰余価値はすべての生産部門のうち、農業においてのみともわかりやすくはつきりとあらわれる。それは農業においては、生産者が生産期間中に消費する生活資料以上に生産された、生活資料の剰余にあらわれる。したがって価値一般の分析なくして、価値の性質にかんする明白な理解なくして、認識されうる。これに反して工業においては、人は一般に労働者が直接にふたたび彼の生活資料・またはそれ以上の剰余を生産しているのをみない。この過程は流通によって媒介されており、したがってその理解のためには、価値一般の分析を必要とする。しかるにケネーには、さきにもたうに、明確な価値の概念が缺けている。それゆえ彼にとつては、農業労働は剰余価値をつくり出す唯一の生産的労働であり、地代は彼の知る剰余価値の唯一の形態だったのである。⁴¹⁾かくして、ケネーは剰余価値の発生にかんする研究を流通過程から生産過程に移すことによって、資本制生産の分析の基礎をすえたのであるけれども、その生産過程はどこまでも農業という特殊の生産部門にかぎられていたのである。

このような純生産物の理論と、それにもとづく資本理論（土地前払（農耕を可能にするために地主のなす投資）、原前払（のちの固定資本に相当する）、年前払（おなじく流

動資本に相当する)への資本区分——および、階級理論——生産階級(小作農業者)、地主階級、不生産階級(商工業者)への階級区分——を基礎として、ケネーは彼の経済理論の総括としての『経済表』(Tableau Economique, 1758)『経済表範式』Formule du Tableau Economiques, 1766)を作成した。『経済表(範式)』は「六つの出発点と帰着点とをむすぶ五本の線からなる一つの表」のうち、「資本の全生産過程を再生産過程として、流通をたんにこの再生産過程の形態として叙述し」、同時にこの再生産過程のうち、収入の起源、資本と収入との交換、再生産的消費と終局的消費との関係を包括せしめ」ようとした、「経済学の幼年期」における「もっとも天才的な着想」であった。しかしそこにも、さきにもみた彼の理論の缺陷に対応する誤謬がふくまれていた。すなわち不生産階級(商工業者)はならの剰余をも獲得せぬたんなる賃労働者としてとりあつかわれ、また彼らは原前私を用いず年前払だけで生産を営むものとされ、さらに彼らの生産額は社会の再生産総額のうちにくまれぬものとみなされてくることまである。

かくしてわれわれは、ケネーが農業のみを生産的と解し、地代を唯一の剰余価値と考えた点に、彼の学説の封建的性格をみるのである。彼はアンシャン・レジーム(旧制度)のなから新しく生まれようとしていたブルジョア社会を、自然的理想社会としてつかみ、それが彼の経済学の対象となり、その実現が彼の政策の目的であったのであるが、しかも彼の場合にはそのブルジョアの進歩性が封建的外皮をまとうっており、彼の体系は「封建制度のブルジョアの再生産」⁴³⁾としてあらわれているのである。

④ Quesnay, Maximes, Oeuvres, p. 331.

⑤ Marx, Theorien, Bd. I, S. 36-37. 訳六〇頁 参照。

⑥ Ibid. S. 92. 訳一一六頁。

⑦ Ibid. S. 41. 訳六四頁。

4

われわれはつぎに重商主義と重農主義との成果を総括して、資本主義社会をはじめて全面的に把握し、一つの独立の科学としての経済学——古典経済学——を創始したところの、アダム・スミス(Adam Smith, 1723-1790)の剰余価値思想に移ろう。スミスの『国富論』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776)の週期的意義はなによりもまず、彼が富を創造するところのすべての規定性を放棄した労働一般——商業労働でも、農業労働でも、工業労働でもなく、そのいづれたるを問わぬ労働一般——を価値の実体と考え、この労働価値説を全経済学体系の基礎にす

えたことである。若きマルクスはエンゲルスとともに、アダム・スミスを「国民経済学的ルッター」とよび「労働をその原理として認識した国民経済学」の祖としたのである。⁴⁶⁾

④ Marx, Einleitung Zur Kritik der politischen Ökonomie, Kritik (Institute Ausgabe), S. 239-40. 訳二八二頁参照。そこはつぎのようにべられてゐる。「重金主義は富をまだまったく客体的に、自己の外にある、貨幣の姿をした物だと考えた。工業主義または商業主義（＝重商主義）は、富の源泉を対象から主体の活動——商業労働および工業労働——におきかえたが、これは重金主義の立場にたいする一大進歩であつた。だがそれでもなお、この活動自体は、貨幣をもうけるという限定性において把握されていたにすぎなかつた。この主義にたいして、重農主義は（さらに一進歩をとげたのであつて、それは）労働の一定の形態——農業——を、富を創造する労働と考え、客体そのものをもはや貨幣の仮装においてではなく、生産物一般として、労働の一般的结果として把握した。だがこの生産物は活動の限定性に相応して、やはりなお自然によって規定された生産物——農業生産物、たんなる土地生産物——にすぎなかつた。アダム・スミスは富を創造する活動のすべての規定性を放棄し、工業労働でも商業労働でも農業労働でもなく、そのいずれたるを問わず、労働一般を（富を創始する労働だと考えたのであるが、これは）彼の巨大な進歩であつた。富

を創造する活動の抽象的な一般性ととともに、いまやわれわれはまた、富として規定される対象の一般性を、生産物一般を、すなわちやはり労働一般ではあるが、しかし対象化された過去の労働としての労働一般をえたのである。この推移がどんなに困難で大きかつたかは、アダム・スミス自身がまだときどき重農主義に逆もどりしてゐることからもあきらかである。」と。

⑤ Engels, Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie, 邦訳『選集』補巻二二〇一頁。
⑥ Marx, Manuskripte, 訳三三〇頁。

スミスの労働価値説は、支配労働価値説——交換価値の真実の尺度は商品がその所有者をして購買または支配するをえせしめる労働量である——と、投下労働価値説——交換価値の真実の尺度は商品の生産または獲得に要する労働量である——との二つの意味をもつが、彼によれば「資本の蓄積と土地の私有とにさきだつ初期未開の社会状態」⁴⁷⁾すなわち前資本主義社会においては、労働の全生産物は労働者に属し、「ある商品の獲得または生産に通常使用される労働量が、その商品の通常購買ないし支配または交換する労働量を決定しうる唯一の事情である」⁴⁸⁾だから彼は、そこでは「さまざまな対象を獲得するために必要な労働量のあいだの割合が、それらをたがいに交換しあふにさいして、なんらかの準則をま

たえうる唯一の事情である。」⁴⁹⁾という。しかるに資本主義社会にはいり、利潤および地代が発生し、労働の全生産物が労働者に属さなくなるとともに、彼は利潤や地代も商品の交換価値の構成部分となり、投下労働量は支配労働量を決定しうる唯一の事情ではなくなると考える。すなわち彼はすべての商品の交換価値は、賃金・利潤・地代の「三つの部分に分解」ということから、逆に「賃金と利潤と地代とは、すべての交換価値の三つの本源である。」⁵⁰⁾と主張するのである。すなわちスミスは、資本主義社会については投下労働価値説、すなわち本来の労働価値説を放棄し、構成価値説あるいは生産費説をとるわけである。

スミスのこの移行には深い根拠がある。支配労働量は「労働の価値」、すなわち賃金を意味する。労働者が独立の商品生産者であるとき——単純商品生産社会——には、労働者は一二労働時間の生産物である商品をもって、他の商品に実現されている一二労働時間を買う。それゆえ彼の労働の価値は彼の商品の価値に等しい。生きた労働の一定量は対象化された労働の同一量と交換される。このような前提のもとにおいては「労働の価値」は、商品にふくまれている労働量とおなじく価値の尺度たりえた。しかるに生産手段が特定の階級に属し、労働力は他の階級に属する生産様式——資本制生産様

式——においては、正反対のことがおこる。労働の全生産物またはその価値は、労働者には属さない。生きた労働の一定量は対象化された労働の同一量を支配しない。または商品に对象化された労働の一定量はそれ以上の生きた労働量を支配する。スミスは商品交換から出発し、ここでは生産者は商品の販売者および購買者としてのみ対立するのであるから、彼は資本と賃労働とのあいだの、対象化された労働と生きた労働とのあいだの交換においては一般的法則が止揚され、商品（労働という商品）がそのあらわしている労働量の比率において交換されないことを発見した（発見したように彼にはおもわれた）。そこで彼は資本主義社会では、労働時間は価値の尺度ではなくなると結論したのである。彼はむしろ、リカードが彼にたいして正しくいっているように、その反対を結論せねばならなかった。すなわち労働の量と「労働の価値」とはもはや同一ではなく、したがって商品の交換価値はそのなかにふくまれている労働時間によって規定されるが、「労働の価値」によっては規定されないと⁵¹⁾。

ここでスミスによって「労働の価値」として意識されているものは、実は労働力の価値である。それは労働者の生存に必要な生活資料の生産に要する労働時間によって規定されるが、労働者は現実において、労働力の価値を、すなわち賃金

の等価を再生産する労働時間を超えて、資本家のために無償で労働させられている。したがって商品にふくまれている労働時間、すなわち商品の価値は、労働力の価値よりも——利潤および地代として資本家と地主によってえられる剰余価値の大きさだけ——大きいのである。スミスの議論はただこの現実の顛倒された表象にすぎない。生産過程における資本の労働力にたいする搾取が、流通過程における資本と労働との不平等交換として意識されているのである。したがってスミスはもとより誤っているのであるが、しかもこの誤りにおいて資本制生産の秘密にふれているわけである。このことをスミスを批判したりカードは理解しなかつたのである。

⑴ Smith, *Wealth of Nations*, ed. by Cannan, Vol. I, p. 49. 大内兵衛訳（岩波文庫）（一〇〇頁）。

⑵ *Ibid.*, p. 49-50. 訳一〇一頁。

⑶ *Ibid.*, p. 49. 訳一〇〇頁。

⑷ *Ibid.*, p. 59. 訳一〇九頁。

⑸ Marx, *Theorien*, Bd. I, S. 128-130. 訳一五三—五頁

参照。

さてスミスによれば、資本の蓄積とともに利潤が発生し、生産物の価値は賃金と利潤とに分れる。彼は知っている。「資本が特定の人々の手中に蓄積されるやいなや、彼らのう

ちのあるものは、自らその資本を用いて勤勉な人々に原料と生活資料とを供給して仕事をなさしめ、その製品の売却によって、すなわちその労働が原料に附加するものによって、利潤を獲得しようとするであろう。……労働者たちが原料に附加する価値はこの場合二つの部分に分解し、その一部分は彼らの賃金を支払い、他の部分は彼らの雇主が前貸したところの原料と労賃との全資本にたいする利潤を支払う。」と。

ここで利潤は労働者が附加した価値の一部分としてとらえられている。それは資本家が支払うことなくして売るところの労働量である。彼の利潤は、彼がその商品にふくまれている労働の一部分を支払わなかつたが、しかもこれを売るということからでくる。それゆえ、スミスはここで利潤を剰余価値としてとらえているわけである。「これによって、アダム・スミスは剰余価値の真の源泉を認識した。」⁵³⁾

地代についてもおなじことがいわれる。スミスは書いている。「ある国の土地がすべて私有財産となるやいなや地主は他のすべての人々とおなじく、彼らがかつて蒔いたことのない場所で収穫するのを好み、その自然的な生産物にたいしてすら地代を要求する。……いまや彼（労働者）はそれ（自然の果物）を採取するための許可にたいして代償を支払わねばならず、そして彼の労働が採取もしくは生産するもの的一部

分を地主に提供しなければならぬ。この部分、またはおなじことであるが、この部分の価格は土地の地代を構成する。⁵⁴⁾」スミスにおいては、地代は直接労働者から汲みとられる剰余価値として観念され、利潤の分化部分としてはとらえられていないが、ともかく地代も利潤とおなじく剰余価値として把握されているのである。

この利潤および地代の剰余価値としての把握は、のちの箇所（第八章「労働の賃金について」）ではいつそう明白にあらわれている。すなわち、「土地の私有と資本の蓄積とにさきだつ原始状態においては、労働の全生産物は労働者に属する。⁵⁵⁾」しかし、「土地が私有財産となるやいなや、地主は労働者とその土地から生産し、または採取しうるほとんどすべての生産物について、一種の分けまえを要求する。彼の地代は土地に使用される労働の生産物からの第一の控除をなす。土地を耕す人がその収穫のときまで、自分自身を維持するのに必要な手段をもっていることは稀である。彼の生活維持費は一般に彼を傭う傭主、すなわち農業者の資本から彼に前払される。そして農業者は耕作者の労働の生産物の分前にあずかることができなければ、あるいは彼の資本を利潤とともに回収することができなければ、彼を傭うことになんの利益をも感じないであろう。この利潤は土地に使用される労働の生産

物からの第二の控除をなす。ほとんどすべての他の労働の生産物も利潤の控除を免れない。一さいの手工業と製造業において、大部分の労働者は彼らの仕事の原料と、その仕事が完成するまでの賃金と生活維持費とを彼らに前貸ししてくれる傭主を必要とする。彼は彼らの労働の生産物、またはこの労働が原料に附加する価値の分けまえにあずかる。そしてこの分けまえこそは彼の利潤なのである。⁵⁶⁾」と。

したがってスミスはここで率直に、利潤および地代を労働者の生産物、または労働者によって原料につけ加えられた労働量に等しい価値からの、控除として示しているのである。そしてこの控除は、さきにスミスがみずから説明しているように、労働者がただ彼の賃金の等価のみを提供する労働量を超えて、原料につけ加える労働の部分、すなわち彼の剰余労働あるいは不払労働からのみ成りたちるのである。ここにスミスが剰余価値の分析において、重農主義者を超えてなした大きな進歩をみるのである。重農主義者においては、剰余価値をつくりだすものは、ただ労働の一定の種類——農業労働——にすぎない。そしてこの特殊の労働において現実には剰余価値をつくりだすものは、自然であり、土地である。しかしながらスミスにおいては、価値をつくりだすものは一般的社会的労働であり、必要な労働量である。剰余価値は、生産

手段の所有者が生きた労働との交換によって取得するところの、この労働の部分以外のものではない。それゆえに、重農主義者においては、剰余価値はただ地代の形態においてのみあらわれる。スミスにおいては、利潤・地代、および利子が剰余価値の異った形態にすぎない。⁵⁷⁾

もっともスミスはさきにもたように、この商品価値の賃金・利潤・地代の三部分への分解から、ただちにこの三部分からの商品価値の構成に移り、労働価値説を放棄して、剰余価値説とはあいりれない生産費説に移行しているのであるが、ここではスミスのこのような外面的・現象的分析ではなくて、その内面的・科学的分析こそが問題なのである。

- ② Smith, *ibid.* p. 50. 訳一〇一二頁。
- ③ Marx, *Theorien*, Bd. I S. 141. 訳一六四―五頁。
- ④ Smith, *ibid.* p. 51.
- ⑤ *Ibid.* p. 66. 訳一三〇頁。
- ⑥ *Ibid.* p. 67. 訳一三二―三頁。
- ⑦ Marx, *ibid.* S. 148-9. 訳一七一―二頁参照。

5

古典経済学の創始者アダム・スミスは、かくして労働価値説をはじめて広汎な基礎のうえにすえただけでなく、また剰余価値の源泉を明白に指摘することによって、剰余価値説の

成立への大きな寄與をなした。しかるに古典経済学の完成者デヴィッド・リカード(David Ricardo, 1772-1823)においては、剰余価値にかんする説明は、一方においては理論的な厳密さを加えたけれども、他方においてはスミスのような率直さを失い、一面的な理解に陥つたのである。

まず、リカードの労働価値説がどのような点で、スミスから本質的に前進したかをみることにしよう。ブルジョアの経済体制の内的連関の、その生理学の、基礎であり、出発点であるものは、労働時間によって価値が決定されるということである。ここからリカードは出発し、それからこれまで経済学者たちによって叙述されてきた経済上の他の関係や範疇が、どこまでこの基礎・出発点と一致するか、あるいは矛盾するかを探究するのである。⁵⁸⁾ここにリカード経済学の大きな歴史的意義があり、彼においては、価値論の経済学の基礎理論としての地位が、スミスの場合よりもはるかに明確となっているのである。

つぎに彼はスミスの支配労働価値説をしりぞけ、資本主義社会においても投下労働価値説が妥当することを明かにすることによって、労働価値説を擁護している。彼は、「一商品の価値、すなわちそれと交換される他の商品の量は、その生産に必要な相対的労働量に依存し、その労働にたいして支払

われる報酬の多少に依存しない。」(『経済学および課税の原理』第一章第一節標題)⁵⁹⁾と主張して、スミスは投下労働量と支配労働量とがあたかも同義であるかのごとく、この二つを価値尺度として使用しているといつて非難する。事實はすでにみたように、スミスはこの両者は資本主義社会においては相異なるものであるから、商品のうちふくまれる労働量は商品の価値を決定することをやめ、むしろ商品の価値は労働の価値によって、一定量の労働をもって買い、または支配しうるところの労働量によって決定されるといっているのである。

しかしリカードがスミスにたいしてつぎのようにいっているのは正しい。すなわち、二つの商品にふくまれる相対的労働量は、この労働量のうちどれだけが労働者自身にあたえられるか、この労働がいかなる報酬をうけるかによつては、まったく影響されない。だから相対的労働量が労働賃金のおこなわれる以前に価値の尺度であったならば、労働賃金のおこなわれたのちにそうではなくなるという理由はまったくない。

スミスはこの二つの表現が同義であるかぎり、それらをともに使用した。しかしそれは、この二つの表現が同義でなくなるやいなや、正しい表現のかわりに誤った表現を使用する理由にはならないと、だがりカードはこれによつてなんら問題を解決したのではない。⁶⁰⁾

リカード価値論のスミスにたいするいま一つの大きな進歩は、彼が価値を決定する労働のなかに商品に直接加えられた労働とならべて、器具・道具・建物に投ぜられた労働をもふくませている点である(第一章第三節)。しかるに彼はこの器具・道具・建物、すなわち生産手段を、スミスのいわゆる未開社会、すなわち前資本主義社会についてさえ資本とよんでいる。ここにリカードの資本制生産を、社会的生産の永遠の自然形態とみなす、非歴史的抽象性がとくにはなほだしくあらわれている。彼は資本を定義して、「資本は一の富のうち生産に使用せられる部分であつて、労働に効果にあたえるに必要な食物・衣服・道具・原料・機械等よりなるものである。」⁶¹⁾といっている。そして彼はこの資本を、間接労働あるいは蓄積労働としてのみとらえているのである。このような資本の概念をもち、そしてそれを間接労働とみるにしても、その間接労働が直接労働と相対立する関係のもとにおいてはじめて資本として浮びあがることを、すなわち資本は生きた労働を吸収することによつてのみ活気づく死んだ労働であることを、いかにえれば資本は物ではなく、一つの歴史的社会的生産関係であることを、まったく理解しなかつたりカードが、剰余価値の正確な概念を把握しえなかつたことは当然である。

すでにみたようにリカードは、資本主義社会について労働価値説を放棄するスミスを批判しつつ、そこにおいても労働価値法則が貫徹することを主張しているのであるが、しかも彼自身価値法則と平均利潤法則との矛盾に直面して、ついにその労働価値を修正し、わずかながらも一種の生産費説と妥協するのやむなきに至ったのである（第一章第四、五節）。もつともこの修正の及ぼす影響が比較的軽微であり、以下の部分においてはこれを度外視するとその彼自身の言明からも明かなように、彼の価値論は結局あくまでも労働価値説であつたけれども。すなわち彼は、商品の相対価値はその生産に要する労働量の変化のほか、固定資本と流動資本と割合、固定資本の耐久性、および資本がその使用者に回収される速度が不等な場合には、賃金の騰落によつても変化をこゝむるといふのである。それは事実においては、商品の価値が、平均利潤率の法則の作用によつて、価値とは異るところの生産価格に転化する場合、したがつて剰余価値が平均利潤に転化する場合である。しかるにリカードは、商品価値の決定から剰余価値を説明し、この剰余価値の平均利潤への転化によつて同時に価値が生産価格に転化することを説明しえずして、かえつて平均利潤率をあたえられたものとして前提し、中間の環をとびこえて、これと価値法則との直接的な一致を証明しよう

としたために、そしてまた価値と生産価格とを同視したために、このような問題がおこつたのである。したがつて、それはリカードの方法の根本的缺陷——ブルジョアの諸関係の絶対化・永遠化——につながる問題であるとともに、また他方では、すべてのブルジョア経済学者のうちで、ひと彼のみが、この資本制生産様式の本質——価値法則——と現象形態——平均利潤法則——との矛盾を意識し、その解明に苦しんだことは、それを解決しえなかつたとはいへ、彼の優越性を示すものでもあつた。⁶²⁾

⑤ Marx, Theorien, Bd. II 1 S. 4. 訳『全集』第九卷一八頁 参照。

⑥ D. Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, ed. by Gomer p. 5. 堀経夫訳五頁。

⑦ Marx, *ibid.* S. 114. 訳一五四頁 参照。

⑧ Ricardo, *ibid.* p. 72. 訳九四頁。

⑨ この問題の解決は、『資本論』第三卷第一、二篇において、マルクスによつてなしとげられたこというまでもなく。

さてリカードの剰余価値にかんする見解であるが、彼の分析がつねに量的分析であつて質的分析を缺いていたように——彼自身の言明するように彼の価値論は「絶対価値」——「価値」ではなくて「相対価値」（——交換価値）の変動を研究対

象とするものであったし、彼には価値を交換価値たらしめる価値形態の分析が、したがってまた価値の実体としての労働と貨幣との連関の洞察がまったく缺けていた——、ここでも彼の関心は利潤の大きさの変動だけであって、その本質・源泉を究明することではなかった。マルクスはいう。「リカードは剰余価値の起源には無関心である。彼は剰余価値を、彼のみるところでは社会的生産の自然的形態である、資本制生産に内在する事象のようにとりあつかっている。彼が労働の生産性について語る場合、そのうちに求められるものは、剰余価値の定在の原因ではなくて、剰余価値の大きさを規定する原因にすぎない。」⁶³と。しかしながら、彼の価値論・賃金論からみて、彼が利潤の本質をいかに考えていたかを推察することは困難ではない。

まずリカードは、「賃金として支払われる割合は、利潤の問題においてもとても重要なものである。なぜなら、賃金が低いか高らかに正確に比例して、利潤は高くまたは低いであろうことは、すぐにはわかることだからである。」⁶⁴といい、また「穀物および製造財貨がつねに同一の価格で売れると仮定すれば、利潤は賃金が低いか高らかに比例して、高くあるいは低いであろう。」⁶⁵といっているほか、いたるところで利潤と賃金とが一定の価値量の分たれた二部分であり、したがっ

てたがいに反比例の関係にあることを力説している。しかしそのことだけでただちに、彼が利潤は労働の生産した価値からの搾取によってなりたつと考えていたとはいえない。というのは彼にあっては、さきにもたように、間接労働と直接労働とが等しく価値の形成にあずかるものとされ、価値増殖過程におけるその役割の差異——すなわち間接労働はたんに一つの商品から他の新しい商品に、そのまま部分的または全部的に移転されるだけであるのに、直接労働はこれに反して自らの等価のみならず、それ以上の新しい価値をつくりだすということ——が見落され、したがってまた不変資本と可変資本との区別が明かにされていなかったからである。だがリカードは、このように賃金と利潤とがたがいに反比例の関係にあることをのべているほかに、また労働の価値、すなわち賃金の本質をつぎのように規定している。「労働の自然価格とは、労働者をして平均的に生存し、かつその種族を増減なしに永續せしめるに必要な価格である。」「労働の自然価格は労働者および彼の家族を支えるに必要とされる、食物・必需品および便利品の量に依存する。」とそれゆえ彼は労働の価値、賃金が労働者の生存に要する生活資料の価値によって定まると考えていたのであり、そして労働者が生産するところの生産物の価値はそれよりも大であることをよく知っていたので

ある。したがってその差額が利潤の源泉をなすことは明かであり、彼の利潤論は事実上ほとんど剰余価値説としての要件をそなえているものであった。

しかしながらマルクスのいうように、リカードは賃金を労働者の日々の生活資料を生産するのに必要な労働時間までに還元しながらも、「直接に労働者の労働日の一部を、そのみずからの労働力の価値の再生産に定められたものと説かないことよって、諸関係の明瞭な理解を抹殺する。」それは結局、彼が労働と労働力との概念を区別することができなかつたからであり、そのために彼は労働力の価値を労働者の労働日のうちの必要労働時間までに還元せず、したがって剰余価値を資本家によって必要労働時間以上に強制的に延長された剰余労働時間にまで「明白なことをもって還元する」こと——これが「重要なこと」なのだが——、をしない。したがって「剰余価値の源泉が明白にならない。」⁶⁶⁾そして彼がこれを明かにしなかつたのは結局、彼が「剰余価値の起源にかんするやかましい問題をあまり深く探求することはきわめて危険だ。」というブルジョアの「正しい本能」⁶⁷⁾をもっていたからである。

このようにしてまたリカードは、利潤を事実上剰余価値として理解する場合にも、「労働日の大きさはあたえられてい

るということから出発する」結果「相対的剰余価値」⁶⁸⁾すなわち労働日の大きさは不変で労働の生産力が可変な場合だけを展開し、資本の絶対的剰余価値の生産、すなわち労働日の延長にたいする強制を見落すのである。そしてそこから利潤（「剰余価値」と賃金とはつねに逆の方向に運動するといふ、彼のそれ自身としては正しくない法則が導きだされるのである）。

さらにリカードは地代を、最劣等地に投ぜられる最大労働量が穀物の価値の決定するということよって基礎づけていゝる。したがって事実上優等地における利潤超過分が地代となると考えられていたわけである。もつともリカードの知っていたのはこのような差額地代のみであつて、絶対地代の概念は彼にはまったく存在しないのであるが。

以上要するに、リカードは彼の労働価値説とそれにもとづく賃金論とに立脚するかぎり、必然的に剰余価値説に導かれねばならなかつたのであるが、しかも彼がブルジョアの立場に立つかぎり、剰余価値説をとることは不可能であつた。この理論的要請と階級的立場との矛盾は、リカードの理論を批判的にあますところなく摂取し、そのうえにプロレタリアートの経済学をうち立てたところの、マルクスによつてはじめて解決されたのである。

- ⑤⑧ Marx, Das Kapital, Bd. I S. 541. 訳③八一三—四頁。
- ⑤⑨ Ricardo, Principles, p. 21. 訳二三頁。
- ⑤⑩ Ibid. p. 88. 訳一一〇頁。
- ⑤⑪ Ibid. p. 70. 訳九二頁。
- ⑤⑫ Marx, Theorien, Bd. II 1 S. 125. 訳一六七頁。
- ⑤⑬ Das Kapital, Bd. I S. 542. 訳③八一四頁。

⑤⑭ Theorien Bd. II 1 S. 134. 訳一七六頁

次回には、この古典経済学とマルクス経済学との橋をなしたところの、リカード理論の社会主義的応用者たちの剰余価値論、およびマルクスにおける剰余価値説の生成過程を考察するつもりである。

(未完)